
優しい巨人

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

優しい巨人

【Nコード】

N5960C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

大昔のノルウェーのお話です。村人の為に命を捧げた優しい巨人。彼はもう帰って来ないのか。北欧神話がヒントだったりします。

第一章

優しい巨人

ノルウェーの古いお話です。この国に白くてとても大きな巨人がいました。

巨人は雪と氷でできていてその身体は山みたいでした。しかしその心はとても優しくかったです。

普通巨人は人々に悪いことをするので恐れられて嫌われていました。けれどこの巨人は皆に対して親切でよくしてくれたので皆から好かれていました。よく子供達とも遊んでいました。

「ねえ巨人のおじちゃん」

子供達に自分の身体を登らせて遊んでいると肩のところに来た子供の一人が彼に声をかけてきました。

「何だい？」

「おじちゃんはいつも寒い時にしか来ないよね」

彼はそう巨人に聞いてきました。

「どうしてなの？」

「それはおじちゃんの身体が雪と氷でできているからなんだ」

巨人はそう子供に言いました。優しい笑みを浮かべた大きな顔を彼に見せています。

「だからなんだよ」

「そうだったんだ」

「そうだよ。雪と氷は暑い時にはないよね」

「うん」

ノルウェーはとても寒い国ですがちゃんと夏もあるのです。その短い夏や春の間は巨人は人々の前に出て来ることはありません。それにはこうした事情があったのです。

「おじさんは暑いのは駄目なんだ。御免ね」

「ううん、それでもいいよ」

子供も優しい笑みを浮かべていました。そして巨人に言います。
「だっておじさんは皆に優しいから。寒い冬もおじさんがいるなら平気だよ」

「そうなのかい？」

「うん、そうだよ」

子供は優しい微笑みのまま巨人に語ります。巨人はその言葉を聞いて心が温かくなるのを感じました。それはとても美しいものと思えました。

「だって吹雪からも獣からも守ってくれるから」

「おじさんがいるから僕達冬を過ごせるんだ」

他の子供達も言います。

「何時までも一緒にいてね」

「おじさん大好きだよ」

「ああ、わかつたよ」

巨人はにこりと笑って子供達に言いました。そうして彼等は仲良く一緒に過ごしたのです。

巨人はその大きな身体を使って色々なことをしました。人々の家を作るのも手伝ったりします。

木を切ってきてそれを持って来たり。指でのこぎりを摘んでそれで切っていくのです。何ともおかしな動作ですがそうして切った木を人々のところに持って来ます。

切られた木がどんどんやって来ます。家を作っている人達はそんな巨人と木を見て思わず溜息をつきます。

「いやあ、これは凄い」

「全くだよ」

「そんなに凄いですか？」

巨人は彼等の声を聞いて上から尋ねました。

「これって」

「いやあ、凄いよ」

「おかげで大助かりさ」

彼等は口々に巨人にこう言います。

「おかげで今日のうちに家が建つよ」

「何か贈り物をしたいけれどね」

「いや、贈り物はもう貰ってますよ」

巨人は彼等にこう言いました。

「もうつて？」

「はい、今ですよ」

「今つて」

「何も贈ったりしていないけれど」

「いえ、贈ってくれていますよ」

巨人は笑って述べます。

「感謝の気持ちが伝わりますから。それが一番の贈り物なんですよ」

「私達の？」

「はい、私はそれが一番好きなんですよ」

人間達の明るく朗らかな顔を見て述べます。

「皆が喜んでくれているから。だから」

「そうなんですか」

「はい。だから私は働くんです」

彼はまた言います。

「皆さんの笑顔を見る為に。それが私への一番の贈り物なんです」

「けれどそれだと悪いですね」

誰かが言いました。やっぱり貰ってばかりじゃ皆気分がよくないのです。

「だったらこうしましょう」

巨人は言いました。

「私も皆さんの笑顔を見て皆さんも私の笑顔を見る。それでいいじゃないですか」

「私達の笑顔を」

「はい」

にこりと頷いてきました。日の光がその大きな身体で隠れて少し

暗くなっていました。それでも笑っているのははつきりとわかりました。

「それでどうでしょうか」

「わかりました。それじゃあ」

「ええ、そういうことで」

皆も巨人もお互いの笑顔を見せ合うことにしました。巨人にとってはそれでよかったです。人々が自分に対して笑顔を見せてくれるだけで。だからこそ悪い奴等からも人達を守りました。

「それ、行くぞ」

デンマークからならず者達がやって来ていました。彼等は雪の中に隠れて進んできます。誰もそれに気付くことはありません。

けれど巨人は違いました。すぐにそれに気付きました。

ノルウェーの皆を攻めようとする彼等を許すつもりはありませんでした。雪の森の中に隠れている彼等を見つけるとすぐに上からこの声をかけてきたのです。

「私は神だ」

「えっ」

「神様だつて!？」

ならず者達は突如上から声が聞こえてきたので思わず辺りを見回しました。しかし巨人の身体はあまりにも大きくて山にしか見えません。だからわかりませんでした。

「そうだ、神様だ」

巨人は彼等が自分に気付いていないのをいいことに言葉を続けます。

「御前達はそれ以上先に行つてはならん」

「どうということなんだ!？」

「一体何が何か」

「若し行けば恐ろしい吹雪に覆われるだろう」

そう言つて実際に吹雪を起こします。森の中まで吹き荒び恐ろしい音が聞こえてきます。そのうえ凍えるまでに寒いのです。これは

堪りません。

「うわわ……」

「さあ、わかったか」

巨人はまた言います。

「御前達が去らなければいけないのが。悪いことはするのではない」

「どうする？」

「どうするったって」

彼等はその凍える吹雪の中で話し合いました。といってもここま
で寒ければもう答えは出ています。どちらにしろ先に進めはしな
い
です。

「帰るか」

「ああ」

こうして彼等は帰りノルウエーの人達は守られました。巨人は彼
等をその頭と力を使って守っていたのです。

第二章

吹雪を起こせる巨人ですが吹雪は他でも起こります。それは恐ろしく強い力で彼でも足を止めてしまったりします。

この時ノルウエーの北から恐ろしい風が吹いていました。今にも家を吹き飛ばさそうとまでしていても強い力です。寒く雪まで吹き荒れて恐ろしいまでです。

人々は家の中で凍えながら耐えています。しかしその家ですらきしみ今にも吹き飛ばされそうです。

「お母さん、このままじゃ」

「大丈夫だよ」

母親が娘に声をかけます。それでも親達も家が何時吹き飛ばされるか不安で仕方ありません。

「安心おし」

「うん」

子供達は親にすがりついています。暖炉の火は燃えていますけれども寒さは容赦なく襲ってきます。皆その中で不安にも苛まれています。けれどその時でした。

不意に嵐が家を襲わなくなりました。きしむ音が聞こえなくなり寒さも和らぎました。人々はそれを感じて吹雪が収まったのかと思いました。

「止んだのかな」

「どうか」

それを受けて外に出てみます。しかし吹雪は止んではいませんでした。何と巨人が家々の前に立って吹雪を受け止めていたのです。

「巨人さん」

「何てことを」

「私のことは心配しないで下さい」

巨人は吹雪に正対しながら人々に答えます。

「風は。防いでみせますから」

「けれどこんな風じゃ」

「あんだだつて」

無事で済むとは思えません。人々は驚いた様子で巨人を気遣います。しかしそれでも巨人は下がるうとはしません。そこに立ち続けています。

「ですから心配いりません」

それでも巨人は言うのです。

「私は雪と氷でできていますから。寒いのも嵐も」

平気だと言つて前に立ち続けました。吹雪は冬が終わるまで続き人々はずつと家の中で閉じこもつたままでした。巨人はその間ずっと立つて人々を吹雪から守っていたのでした。

冬が終わると吹雪も止まりました。人々が外に出てみるとそこには誰もいませんでした。巨人の姿は何処にもありませんでした。

「吹雪に削られてしまつたんだ」

「ああ、そうだ」

人々は見えなくなつてしまつた巨人を思つて呟きます。彼等は助かりましたが失つたものはあまりにも大きかつたのでした。

「おじちゃんは何？」

「いなくなつたの？」

子供達は巨人がいなくなつたのを見て親達に尋ねます。けれど彼等も答えることはできませんでした。何故なら巨人がいなくなつてしまつて彼等もとても悲しかつたのです。大人だから泣くことはできませんが子供達に訳を言えない程悲しかつたのです。

「いや、それは」

「そのね」

何とか言おうとしますがやはり言えません。どうにも口ごもつてしまいます。

「また帰つて来るよ」

誰かがつい嘘を言つてしまいました。

「だから安心おし」

「そうなの？それじゃあ」

「また冬に」

「ああ」

そのうえで頷きます。冬に何と言つべきか困りながら。

春が終わり夏になって秋も過ぎます。遂にまた冬がやって来ました。

「なあ」

大人達は冬が近付いてきて顔を見合わせます。

「もうすぐだよ」

「あの人は来ないだろうね」

「そうだろうな」

皆苦い顔をして言い合います。

「いなくなつたからね」

「もう来ることはない」

「子供達が何て言うか」

嘘をついてしまったことを後悔します。けれど言ったことは戻りませんし冬もやって来ます。大人達は暗い顔で冬の訪れを待つのでした。

けれど冬が来ると。地響きの様な音が聞こえてきました。

「えっ」

「この音は」

皆その音には聞き覚えがありました。その音は。

巨人の足音でした。あの山の様な巨人がまたやって来たのでした。

「やあやあ」

「あっ、おじちゃんだ」

「また来てくれたんだ」

子供達は彼の姿を見て楽しげに声をあげます。けれど大人達は呆然としたままでした。

「どうしたんですか？」

巨人もそれに気がきます。それで声をかけてきたのです。

「そんなに驚いて」

「驚いたも何も」

大人達は巨人に対して言います。

「どうしてあんなまた」

「消えたっているのに」

「私は冬そのものですから」

彼等に巨人は優しく微笑んで言うのでした。

「冬が終わったなら消えて。そして冬になったらまた蘇るのです」

「そうだったのですか」

「はい、そうなのです」

そう述べてきたのです。その優しい穏やかな声で。

「あの時消えたのもまたそうでした」

「吹雪で」

「ええ。冬が終わったから」

「それではですね」

人々はそれを聞いて問います。

「貴方は冬がある限り私達と一緒にいてくれるのですか？」

「その通りです」

巨人は答えてきました。、またにこりと笑って。

「ですから冬が終わればまた消えて冬が戻れば現われて。ずっと皆

さんと一緒にですよ」

「一緒にですか」

「はい」

彼はそのうえで頷いてきました。

「何時までも何時までも」

「私達と一緒に」

「それでいいですよね」

「ええ」

大人達だけでなく子供達も彼の言葉に頷きます。この上なく温か

優しい巨人

い心で。

「これからもずっと」

「私達と一緒に」

こうして巨人はノルウエーの人々の前にまた戻ってきたのでした。そのまま何時までも何時までも彼等と一緒に仲良く暮らし、守っていったのでした。

優しい巨人

完

2007・2・5

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5960c/>

優しい巨人

2009年3月24日11時00分発行